

二〇二五年一〇月九日（須磨浦吟行）

須磨浦の渚に佇ちて秋を聴く  
秋風の須磨に拾ひし忘れ貝  
葛の葉を裏返す風一の谷  
草の穂の触れもす須磨の師弟句碑  
浦風の敦盛塚や竹の春  
須磨の海潮目くつきり秋深む  
須磨涼し縮緬波に船浮かべ  
須磨涼し蕪村の句碑に海展け  
一の谷底ひに届く秋日影  
浜風が頬を撫でゆく須磨涼し  
溪谷の底ひさざめく真葛原  
荒草に紛れひと筋灸花  
秋晴の水平線に島の影  
銀杏散る塚の敦盛寧かれと  
連なりし沖の漁船の水脈涼し  
一の谷奈落は深き落葉かな  
秋草を籬としたる師弟句碑  
遠来の句友と須磨の秋惜しむ  
忍草櫟大樹に宿りけり  
秋の蝶一の谷へと消えにけり  
秋の雲分けてゴンドラ山頂へ

うつぎ  
うつぎ  
うつぎ  
うつぎ  
うつぎ  
なつき  
なつき  
なつき  
なつき  
なつき  
なつき  
澄子  
澄子  
澄子  
澄子  
千鶴  
千鶴  
みきえ  
みきえ  
みきえ  
みきえ  
むべ  
むべ  
むべ  
むべ

葛の葉の奈落到絡む一の谷  
深呼吸したくなる海秋の晴  
菊香る敦盛塚に額づけば  
夏帽子落としてならじ一の谷  
須磨の海へとなだれなす紅葉山  
句座囲む塩屋の異人館涼し  
一の谷埋め尽くしたる真葛原

こすもす  
こすもす  
あひる  
あひる  
せいじ  
素秀  
わかば

吟行句会みの選  
二〇二五年一〇月九日（須磨浦吟行）